

1

「アジアの形成(Shaping Asia)」プロジェクトの試み³

井坂理穂・クラウディア・デーリヒス

プロジェクト発足と「アジア」の概念

「アジアの形成——接続性、比較、協力」プロジェクトは前述のように、クリスティアーネ・ブロシウスとヨアンナ・プファフ＝チャルネツカによって2018年に開始された共同研究の試みであり、ドイツに拠点を置く研究者たちとアジア諸地域に拠点を置く研究者たちのネットワークをつくるかたちで進められた。プロジェクトの目的をひとことで表すならば、国家、地域、文化などの枠組みや学問分野の枠組みを超えたアジア研究を進めるためのグローバルな研究者ネットワークの構築と、そのネットワークをもとにした議論、研究のためのプラットフォームづくりということになるだろう。そこで取り組むべき課題は、「アジアの様々なダイナミクスを形づくる（または形づくってきた）複雑なつながりを、通時的、共時的観点から、協働的に把握する」[Brosius and Pfaff-Czarnecka 2019: 1] ことであった。そのための方法論としては、後で述べる「接続性、比較、協力(Connectivities, Comparisons, Collaborations)」という「3つのC」が掲げられた。

プロジェクトを立ち上げた2名はともに、ドイツの研究・教育機関を拠点として、南アジア（ネパール、インド）を研究対象としている文化人類学者である。両者が組織した2018年のプロジェクト発足時のワークショップには、約40名の研究者が招かれたが、そのときに配布された各自のプロフィールをみると、彼らが対象としている地域がアジアの広範囲に及んでいることが確認できる。学問領域としては文化人類学者が多いものの、社会学、歴史学、教育学、地域研究などの分野で活動する研究者たちも多く含まれていた。彼らの研究拠点には、ドイツ各

3 「アジアの形成」プロジェクトの内容については、Brosius and Pfaff-Czarnecka [2019]、Brosius, Derichs, Pfaff-Czarnecka, and Rao [2021]、及びプロジェクトのウェブサイトをもとにまとめ、随所でこのプロジェクトの主催で開催されたワークショップ（とりわけ以下の2つのワークショップ）における議論の内容を紹介した。(1) 'Shaping Asia/s: Connectivities, Comparisons, Collaborations' (2018年2月6-7日、ビーレフェルト大学) (2) 'Entangled Comparisons: Grounding Research on Asia — Expanding Research Methodologies' (2019年9月5-6日、ビーレフェルト大学)。本ブックレットでこのプロジェクトを紹介することに賛同し、執筆にあたってご協力くださったプロジェクト代表者のブロシウス氏、プファフ＝チャルネツカ氏に、この場を借りて謝意を表したい。また、本プロジェクトと関連する地域研究をめぐる議論として、Derichs [2017] もあわせて参照されたい。

地のほか、インド、シンガポール、インドネシア、中国、日本などの研究・教育機関が含まれていたが、この後プロジェクトが進行するなかで、そのネットワークはさらに多様な地域の研究者を含むものへと拡大していった。

「アジアの形成」プロジェクトが地域・分野横断的な視点を強調しながら、同時に「アジア」という地域概念をプロジェクト名のなかに用いていることや、この「アジア」が何を指すのかをめぐっては、結成当初から活発な意見交換がなされた。代表者たちがここで用いる「アジア」という言葉は、いうまでもなく、一括りに論じられうるような「アジア」を想定したものでもなければ、「ヨーロッパ」と明確に区切られた「アジア」を意味するものでもない。プロシウスとプファフ＝チャルネツカはプロジェクトの概念を説明する際に、ガヤトリ・スピヴァクの「アジアは場所ではない。しかしその名前は歴史と文化政治を背負っている」[“Asia” is not a place, yet the name is laden with history and cultural politics.] [Spivak 2008: 9] という言葉をたびたび引用している。そのうえで彼らは、「アジア」が想像され、かつ重要な意味をもつカテゴリーとして機能してきた歴史や現状を踏まえて、「アジア」という概念が学問の場や公共の場において、誰によってどのように用いられ、どのような役割を果たしているのか、誰がそれに対抗したのか、などの問いを検討すべき課題として掲げている。このようにアジアという概念をめぐる理解を深めるとともに、本プロジェクトは、アジアを形づくり、変化させてきた複雑なつながりを明らかにすることに深い関心を抱いており⁴、これら双方の意味合いから、このプロジェクトはまさにその名称のとおり、「アジア」の「形成 (shaping)」を扱うものとなっている。

なお、概念としての想像された「アジア」にしても、多様なつながりのなかから立ち現れる「アジア」にしても、それは単一のものではありませんことから、プロシウスとプファフ＝チャルネツカはワークショップにおいて、しばしば ‘Asia or Asias’、あるいは ‘Asia/s’ の表現も用いていた。彼らはまた、上記のような意味合いでの「アジアの形成」が、世界が様々に形づくられ、変容する過程の一部であり、それ以外の諸地域と切り離して考えることができないことを強調しており、そこではこのプロジェクトとグローバル研究、グローバル・ヒストリー、「グローバル・サウス」に関する研究動向との連関も意識されている。

4 この点に関連する議論として、プロシウスとプファフ＝チャルネツカは、アジアを区切られた地理的な場所としてではなく、相互につながられ、参照される空間として捉える Roy [2016] の議論も参照している。

プロジェクトの方法論

前述のように、ブロシウスとプファフ＝チャルネツカはこのプロジェクトにおける方法論として、接続性 (Connectivities)、比較 (Comparison)、協力 (Collaboration) の3つを提起した。これらの言葉は、世界各地で行われてきたグローバル・ヒストリーの試みのなかでもしばしば言及されてきた。日本では例えば「新しい世界史」を提唱した羽田正の議論〔羽田：2011, 2018他〕などが想起されるだろう。しかしながら、同じような言葉が使われている場合でも、それを用いる研究者によってそこでの強調点やニュアンスは異なってくる。このプロジェクトで上記の3つの言葉がどのように説明されていたのかを、以下で簡単に紹介したい⁵。

「アジアの形成」プロジェクトでは国家、地域、「文化」の枠組みを超えた様々な「接続性」に関心が向けられたのだが、この「接続性」という言葉は、つながれたものの間の相互関係とともに、「つながりがつながれたものをどのように変化させるか (How the connections transform what is being connected)」〔Brosius and Pfaff-Czarnecka 2019: 5〕という変化の側面にも焦点を当てるという意味合いで用いられている。また、そこでは接続とあわせて、もつれや摩擦、さらに断絶にも関心が向けられた。

一方、「比較」という手法に関しては、異なる時代や地域に関するものごとや事象を比較したり、研究者たちが用いてきた概念や研究手法自体を通時的・共時的に比較することが試みられた。さらに、比較という行為（そのなかには公然と行われているものもあれば、暗黙裡になされているものもある）そのものの意味にも関心が向けられた。すなわち、比較がどのように行われ、それが知の形成においてどのような役割を果たしてきたのかも議論の対象となった。

以上の「接続性」「比較」という手法をプロジェクトにおいて推進するためには、多様な学問分野で活動してきた研究者たち、さらに異なる地域を専門とし、異なる研究拠点、研究環境で活動してきた研究者たちが集い、継続的に情報・意見交換を行うためのネットワークやプラットフォームが必要となる。こうしたネットワーク、プラットフォームづくりが、3つめの「C」にあたる「協力」である。このプラットフォームは、特定のテーマについて、地域・文化横断的、分野横断的な研究を進めるために用いられるだけではなく、それぞれの研究拠点における研究方法や学問分野の枠組み、そこで影響力をもつ概念などを比較を通じて相対化し、より相互に開かれた研究体制を構築するための意見交換の場としても機能

5 同プロジェクトにおけるこれらの方法論に関しては、注3に挙げた文献のほか、アジア域内での学生の移動を考察した Pfaff-Czarnecka [2020] を参照。

した。そこでは例えば、同じ概念がそれぞれの言語、地域で異なる意味合いをもつことや、それらの違いを踏まえたうえでの対話や「翻訳」のあり方が論じられた。あるいは、「××学」「××研究」などの学問分野の区分やそれぞれの分野の役割、相互の関係性についての地域・時代ごとの差異などが論じられた。さらには、学術の世界におけるグローバル化（そこでの英語の支配的な地位も含め）や、学術的評価の規範化（何が論じるに値するテーマであり、どのような様式で論じるべきかの判断も含め）が、それぞれの地域でこれまで発展してきた学問のあり方にいかなる影響を及ぼしているのかも、検討すべき問いとされた。

これに関連して、メンバーの関心事には、アジア諸地域で発展した、あるいはそれらの地域を研究するなかで発展した概念や研究方法を、欧米その他の地域の事例を研究するうえでも有効なものとして発信していくことや、ヨーロッパの学問伝統に大きく依存した現在の人文科学・社会科学のあり方を再検討し、そこにアジア発の概念や方法論をより積極的に組み込んでいくことなども含まれている⁶。さらには研究者自身や彼らを取り巻く様々な研究・教育制度その他の環境を、通時的・共時的比較を通じて相対化しながら、新たな制度や環境づくりの可能性を探ることも議論の対象とされた。

地域研究

ここで、本プロジェクトが、ドイツを拠点とする研究者たちを中心として立ち上げられたことからくる特色についても、ひとこと触れておきたい⁷。このプロジェクトがドイツに主な基盤をおいていたことにより、ネットワーク内で方法論を議論する際には、ドイツにおけるアジア研究の歴史や現状が比較のための参照軸としてしばしば用いられた。このことは、ヨーロッパの人文科学・社会科学におけるアジア研究の位置づけを振り返りつつ、あわせてアジア諸地域におけるアジア研究の発展過程を、比較の視点から検討する作業を促した。それと同時に、ポストコロニアリズムなどの論調のなかで、ともすると「ヨーロッパ」「欧米」「西洋」の学問伝統や学問潮流が一括りにして論じられがちな傾向に対して、ドイツの状況を参照軸としておくことにより、「ヨーロッパ」「欧米」「西洋」という括りの内

6 詳細については Alatas and Sinha [2017], Derichs [2019], Heryanto [2019]などを参照。これらの議論のなかには、ポストコロニアリズムの潮流のなかで注目を集めたディベシュ・チャクラバルティの「ヨーロッパを地味化する」試みの提起とつながるものもみられる [Chakrabarty 2000]。

7 「アジアの形成」プロジェクトはドイツ研究振興協会（Deutsche Forschungsgemeinschaft, DFG）やドイツ学術交流会（Deutscher Akademischer Austauschdienst, DAAD）からの支援を受けている。

部における差異や多様性にも目が向けられることとなった。

ドイツやイギリスなどの事例をみると、「歴史学」「社会学」などの方法論に基づく学問分野では、アジアを対象とした研究が周縁化される傾向があり（ただし文化人類学を除く）、アジア研究は「東洋学」や「地域研究」に結びつけられることが多かった。しかも「アジア」のなかでもさらに細かい区分が設けられ、「日本研究」「中国研究」「インド学（Indology）」「東南アジア研究」などがそれぞれに異なる方法論を伴いつつ展開されてきた [Brosius and Pfaff-Czarnecka 2019: 6]。本プロジェクトを発足させたブロシウスとプファフ＝チャルネツカは、アジアの異なる地域を研究対象とするドイツ在住の研究者の間で、これまで相互交流が必ずしも進められてこなかった状況を踏まえ、これらの区分を超えた対話を活性化することも、本プロジェクトの重要な意義であると考えている。さらに、「日本研究」「中国研究」「インド学」などの区分ごとの方法論の違いがどのように生まれてきたのかという背景にも関心を寄せている [ibid.]。

一方、アジアをめぐる研究が、アジアの諸地域でどのように展開されてきたのかについては、それぞれの地域や研究機関によって状況が大きく異なり、こちらについても一律に論じることとはできない。アジア諸地域では、ヨーロッパの場合とは異なり、歴史学や社会学などの学問分野のなかでも、自国を中心としてアジアに関する研究が行われてきたのだが、その構図はそれぞれに異なっている。例えば日本では、第二次世界大戦以前から大学における「史学」のなかには「東洋史」が含まれており、「国史」「西洋史」と並ぶ一区分として存在している⁸。歴史学以外の学問分野においても、日本やその支配領域を中心に、アジアの様々な地域に関する研究が進められていた。

ただし、日本でも戦後に新たな学問分野として「地域研究」が創設されており、この「地域研究」の枠組みのなかでもアジア研究が展開していく。この「地域研究」という分野は、アメリカの地域研究の影響下に戦後日本に導入されたものであったが、アメリカでは政治・政策と密接に関連したかたちで地域研究、アジア研究が展開されたのに対して、日本ではこのような研究のあり方への批判的観点が当初から示されていた。そのことが日本での地域研究の発展のしかたに影響を

8 日本の歴史学とヨーロッパの歴史学の枠組みや位置づけの違いについては、羽田 [2011, 2018] などを参照。近代日本の大学における「歴史学」は、帝国大学（のちの東京帝国大学、東京大学）での「史学」の創設（1887年）に始まり、1889年にはそのなかに「国史」の授業が設けられる。一方、「東洋史」講座は1907年に京都帝国大学に設けられたのが最初である。東京帝国大学では、1904年の「支那史学」講座の開設を経て、1910年にこれをもとにした東洋史学講座が設立されている [羽田 2011: 24-28]。

与えたとの評価もある〔濱下 2011: 18〕⁹。アジア諸地域でのアジア研究の歴史やその特徴は、それら相互のつながりも含め、「アジアの形成」プロジェクトによって検討すべき重要な問いとなっている。

なお、近年ではいわゆる「グローバル時代」の状況を踏まえて、地域研究のあり方について様々な見直しが提起されている¹⁰。「アジアの形成」プロジェクトは、これらの関連する議論にも着目しつつ、地域研究という学問分野のあり方や、グローバル化などの社会変動に対応した組織・制度変更の可能性を引き続き問い続けることになるだろう。

知の創出と循環

以上のような「3つのC」を踏まえながら、プロジェクトでは代表者たちにより、複数のテーマが設定され、そのテーマごとにメンバーが緩やかなグループを形成するかたちで進められた。現時点では、「知の創出と循環（Knowledge production and circulation）」、「インフラストラクチャーとアジアの再構築（Infrastructure and the remaking of Asia）」、「都市の変容（Urban transformations）」、「女性たちの道（Women's pathways）」という4つのテーマが扱われている。ここではこれらのうち、執筆者2名が関わっている「知の創出と循環」研究グループの活動を紹介する。

アジアにおける知の創出と伝播・循環（その変化や断絶も含め）の検討もまた、このプロジェクト全体がそうであるように、知の創出と伝播・循環の具体的事例を検討する作業と、研究者たち自身が関わっている知の創出や伝播、交流の過程を批判的に検証する作業との両方を含むものとなっている。そこでは知の創出の様々な様式が明らかにされ、行為者が知の創出や普及に関わる過程や背景が論じられる。あるいは、知の伝播を介したつながりや、伝播するなかで知が変化する過程、さらには伝播の過程に立ち現れる知と支配の関係などに焦点が当てられる。それはまた、知とは何かという根源的な問いをも投げかけるものとなっている。

このグループでの第1回目の会合（2018年2月）では、知の創出と伝播・循環を検討するうえでのキーワードが話し合われたが、そのなかでとりわけ注目されたのが、「場（sites）」、「源（sources）」「翻訳（translation）」の3つであった。す

9 日本における地域研究の発展過程やその特徴については、Reid [1999]などを参照。

10 一例を挙げれば、2022年度から開始した人間文化研究機構事業の「グローバル地域研究プログラム」では、「グローバル秩序の構築（とその失敗）と変容のメカニズムを、諸地域の比較と関連性という視点から明らかにする新しい地域研究」が提唱されている。詳細については、同プログラムのウェブサイトを参照。https://www.r.minpaku.ac.jp/gasp_steering/index.html (2023年2月13日閲覧)

なわち、知が創出され、伝播・循環するときの場や状況はいかなるものであるのか、その知は何をもとにして創出され、伝播するのか、知の創出や伝播の過程ではどのような「翻訳」が行われているのか、などの問いをめぐり、メンバーはそれぞれの研究対象の事例をもとに意見交換を行った。さらにこれらの問いは、その後のワークショップのテーマへと発展していく。このグループに属する研究者たちによって企画されたワークショップには以下のようなものがある。「知を位置づける——知の場所 (Situating Knowledge/Sites of Knowledge)」「身体、感情、感覚の知 (Embodied, Emotional and Sensorial Knowledge)」「アジアにおける代替言説——関連性、響き、見直し (Alternative Discourses in Asia: Relevance, Resonance, Revisions)」「知を脱植民地化する (Decolonising Knowledge)」「移動する知——つながり、フロンティア、翻訳 (Knowledge on the Move: Connectivities, Frontiers, Translations)」¹¹。

このうち、「移動する知——つながり、フロンティア、翻訳」というタイトルのワークショップ (2021年1月9-10日、東京大学南アジア研究センター主催、オンライン) は¹²、執筆者2名が企画したものであり、そこでは、どのような知識がどこでいつ、なぜ、どのように構築され、伝播しているのかについて、アジア諸地域の事例が示された。そのうえで、国家、地域などの空間を超えた、あるいは時間軸を超えた知のつながりや、知の創出・伝播のなかに現れるヘゲモニー、さらには知のつながり (あるいはその断絶) と人々の帰属意識との関係などが考察された。さらに本ワークショップでは、知の創出や伝播、交流の過程で人々が携わる「翻訳」の行為にも焦点が当てられた。この「翻訳」というテーマをめぐっては、様々な翻訳の様式や翻訳概念を検討する作業とともに、アジアの在地の文脈から生み出された諸概念や学術的方法論を、ほかの地域の言語にいかにかに翻訳するのか、という問いも提起された。

また、執筆者2名はこのほかに、ヒューマニティーズセンターの協力を得て、「知の創出と循環」に関して以下の2つのセミナーを開催した。ひとつはムスリム女性たちとのイスラームに関する知識・情報のやりとりを扱った「人と知が動くとき——アジアにおける旅、移動、メディア (When knowledge moves with humans: Travel, mobility, and media in Asia)」(2021年9月17日、オンライ

11 これらのワークショップの詳細については「アジアの形成」プロジェクトのウェブサイトを参照されたい。<http://shapingasia.net>

12 同ワークショップの開催にあたっては、人間文化研究機構・南アジア地域研究プロジェクト東京大学拠点 (南アジア研究センター) からの助成を得た。プログラムの詳細は、南アジア研究センターの以下のウェブサイトに掲載されている。<http://www.tindas.c.u-tokyo.ac.jp/kenkyukai.html>

ン)であり、もうひとつは近代アジアにおける「翻訳」概念に焦点を当てた「ことばとことばの間——近代アジアにおけることばをめぐる模索——」(2021年12月10日、オンライン)である¹³。

「アジアの形成」プロジェクトは現在も継続中であり、ここでの様々な企画や共同研究、対話や議論がどのような成果を生み出すのかについては、今しばらく推移を見守る必要があるだろう。プロジェクトのなかでは、上記のような議論を教育の現場に反映させる可能性や、ここで構築されたネットワークを利用した地域や分野を超えた教育プログラムの可能性など、教育活動との連関を求める声も挙げられていた。また、ここで出された問いや試みのなかには、他の類似するプロジェクトが提示する問いや試みと重複、連関しているものも少なくない。現在、同時並行で進められているこれらの試みが、学問分野や組織の再編成にどこまで絡みうるのか、そのなかで「アジア」に焦点を当てることがどのような意味をもちうるのか、引き続きプロジェクトの活動を通して注視していきたい。

13 プログラムの詳細は、ヒューマニティーズセンターの以下のウェブサイトに掲載されている。
<https://hmc.u-tokyo.ac.jp/ja/open-seminar/2021/42-when-knowledge-moves>, <https://hmc.u-tokyo.ac.jp/ja/open-seminar/2021/48-between-languages-asia>